モラエスが見た蛍

佐藤 征弥・境 泉洋・宮崎 隆義

徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部、〒770-8502 徳島市南常三島町1-1
E-mail: satoh@ias.tokushima-u.ac.jp

The Firefly Which Wenceslau De Moraes Saw

Masaya Satoh, Motohiro Sakai, Takayoshi Miyazaki

Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima, Tokushima 770-8502, Japan

Abstract

A Portuguese writer, Wenceslau de Moraes (1854-1929), who lived in Tokushima 1913-1929, wrote the essay "Será Ó-Yoné... Será Ko-Haru?..." in June, 1918. In this essay there is a scene in which Moraes heard some children singing an old song of firefly-catching popular among people here in Tokushima in those days. He heard and wrote down the word "tané-mushi" in the song, and he seemed to have thought this word meant a firefly. However, it must have been his misunderstanding of "ta-no-mushi" which is found in an old children's song handed down in Tokushima district. The word "ta-no-mushi" means an insect of a rice field, indicating a kind of firefly, *Luciola lateralis*. In the essay, Moraes wrote that just after hearing the children's song, he saw a firefly in front of his house that was located near Mt. Bizan, and the firefly helped him find the keyhole to open the door of his house by its illumination.

Today four species of firefly are found to live in Mt. Bizan: *Luciola cruciata*, *L. lateralis*, *Lucidina biplagiata* and *Pyrocoelia disciollis*. According to the interviews with some of the elder people in this area, and taking into consideration of the habits of the four firefly species, *L. cruciata* seems to be the most probable species which Moraes saw in the essay.

Key words: firefly, Mt. Bizan, old children's song, ta-no-mushi, "Será Ó-Yoné... Será Ko-Haru?...", Wenceslau de Moraes

モラエスが聞いた「ほたるこい」

大正２年（1913）、ポルトガル総領事の職を辞して徳島に移り住んだヴェンセスラウ・デ・モラエスは執筆活動に専念し、その後次々と作品を発表した。大正７年（1918）6月に書かれた短編 "Será Ó-Yoné... Será Ko-Haru?..." [1]（邦題「おヨネだろうか……コハルだろうか……」）は、徳島での自らの生活を描くとともに、亡くなった二人の女性おヨネとコハルを懐かしむ内容の随想である。この作品の中で、蛍狩りからの帰りと思われる子供たちが歌う

蛍の歌をモラエスが耳にする場面があり、その歌詞が次のように書かれている。

Hotaru-ko, tané-mushi koi!
Andô no naka kara,
Kakurete koi!. . .[2)]

モラエスは、聞いた音をそのままポルトガルの文字にしている。岡本多希子氏による翻訳[3)]から、この部分をその前の一文と一緒に下に示す。

やはり野からの帰りで、次のような俗謡を声を合わせて歌っている少年たちもいる。

ホタル　コ　　タネムシ　コイ！
アンドノ　ナカカラ
カクレテ　コイ！・・・・・

この歌は、わらべ歌「ほたるこい」であるが、現在一般に知られているものとまったく異なる歌詞である。この歌には多くのヴァリエーションがあり、地域によって異なるものが伝わっており、また同じ地域で複数のものが伝わっていることも多い。現在広く歌われている下の歌詞は、昭和８年（1933）に鳥取県の小学校教諭三上留吉が採譜したものである。

ホー　ホー　蛍こい
あっちの水は苦いぞ
こっちの水は甘いぞ

ホー　ホー　蛍こい
山路　こい
行燈の光で
又こいこい

さて、モラエスが書き残した短い歌詞の中に気になる所が三つある。一つ目は出だしの"Hotaru"と"ko"がハイフンで結ばれて一つの単語として扱われていて、次に出てくる"koi!"（来い！）と命令する言葉になっていないことである。二つ目は「タネムシ」が何かということ、そして三つ目は「アンドノ　ナカカラ　カクレテ　コイ」の意味である。モラエス自身は作品中で「正しいかどうかわからないが」としたうえで、次のように解釈している。

蛍よ、親も子も
みんなこちらにやって来い
ああ、なんて愉快なんだ
お腹にもっている
灯から身を隠せ
みんなこちらにやって来い・・・・

言葉を補って意味を汲み取ってはいるものの、先に挙げた疑問は消えない。"Hotaru-ko"の ko が「来い」なのか、「子」であり、幼虫のことを指すのか、あるいは小さいものの意を表したり親愛の情を示したりする接尾語「こ」で、成虫を表しているのか不明である。また、「タネムシ」については、蛍の幼虫の別称であると考えているように思われる。そこで、「タネムシ」「種虫」という言葉について調べてみたが、蛍の幼虫、もっと拡げて虫全般の幼虫を指す用例は、一般語としても、また方言や古語においても見いだすことができなかった。おそらく「タネムシ」はモラエスの聞き間違いなのだろう。

これらの疑問を解消するため、徳島に伝わる民謡を調べたところ、モラエスが聞いた歌と類似するものを四つ見つけることができた。

① 昭和 11 年（1936）の『阿波ノ民謡』より[4)]

螢こい、螢こい
<u>あんどんのかげから</u>
<u>かくれてこい</u>

<u>螢こい、田の虫こい</u>
ほつちの水は、苦いぞ
こつちの水は、甘いぞ
甘い水をのみにこい

（下線は筆者）

この歌では「ホタル　コ」ではなく「蛍こい」

であり、「タネムシ」は「田の虫」となっている。また行灯の「中から」ではなく「かげから」となっている。

② 昭和 63 年（1988）の『阿波の民俗採集録』より小松島市児安（現小松島市田浦町）および那賀郡今津（現阿南市那賀川町）で採譜された歌[5]

ホ、ホ蛍来い
あっちの水はにがいぞ
こっちの水は甘いぞ
ホ、ホ、蛍来い
ホ、ホ蛍来い　田の虫来い
あんどの蔭から蓑着て笠着て飛んで来い

（下線は筆者）

歌詞は①と同じく「ホタル　コ」は「蛍来い」、「タネムシ」は「田の虫」、行灯の「中から」ではなく「かげから」となっている。

③ 平成元年(1989)の『徳島県の民謡 ― 民謡緊急調査報告書』[6] より徳島市川内町の古老（大正五年(1916)生）から採譜した歌

ほー　ほー　ほたるこい
太郎虫こい
あんどのかげから
笠きて　みのきて　とんでこい

（下線は筆者）

この歌では　「タネムシ」は「太郎虫」である。また①②と同じく行灯の「中から」ではなく「かげから」となっている。

④ 同じく『徳島県の民謡 ― 民謡緊急調査報告書』から吉野川市美郷の古老（大正十三年生）から採譜した歌

ほーほーほたるこい　あんどの影から
蓑きて笠きて飛んでこい
ほーほーほたるこい　あっちの水はにがいぞ
あっちの水はにがいぞ
こっちの水はあーまいぞ
ほーほーほたるこい

（下線は筆者）

この歌には、「タネムシ」にあたる部分はないが、行灯の部分はある。そして①～③と同じく行灯の「中から」ではなく「かげから」となっている。

以上の徳島に伝わる歌詞から判断して「ホタルコ」は「蛍来い」で間違いないだろう。また、「タネムシ」についてはそのような例はなく、「田の虫」または「太郎虫」であった。そして「行灯のかげから蓑着て笠着て飛んで来い」の部分は広く伝わっていることが分かった。ただし、行灯の「中から」とするものはなく、すべて「かげから」であった。

次に、徳島以外の地域でも探したところ京都市に伝わる蛍の歌の中で類似するものが二つ見つかった[7]。

ほたろこい　田の虫こい
あっちの水は　あんないし
こっちの水は　うまいし
ほたろこい　田の虫こい

ほ　ほ　ほおたろこい
あっちの水は　にがいぞ
こっちの水は　あまいぞ
ほ　　ほ　ほおたろこい
行燈（あんど）のかげから　笠着てこい

（下線は筆者）

このように京都でも「こい（来い）」であり、「田の虫」の用例もみられることが分かった。そして、ここでも行灯の「中から」ではなく「かげ」からである。しかし、これまでに挙げた例からも分か

るように、この歌のヴァリエーションは非常に多い。「タネムシ」についてはモラエスの聞き間違いとおもれるが、「中から」と「かげから」では音がまったく違っており、聞き間違える可能性は低い。モラエスが聞いたように「中から」と歌われるものがあったとしても不思議ではない。

モラエスの歌詞の解釈について

上記のように、モラエスが記した「タネムシ」の用例は見つけることができず、これに該当するものは「田の虫」あるいは「太郎虫」であった。また、「太郎虫」より「田の虫」の方が一般的のようだ。「太郎虫」の使用例は徳島の一例だけであったが、「田の虫」は徳島で二例の他に京都でも見つかった。後述するようにかつて田んぼに普通に見られたホタルはどんどん減少し、「田の虫」と呼ばれることも少なくなった（雑誌『人と水』の 2007 年 3 号に「田の虫・ホタル―生きものたちが集うホタルの飛ぶ田」というコラムがある[8]）。モラエスが聞いたのは「田の虫」であった可能性が高い[9]。

次に「アンドノナカカラ カクレテコイ（行灯の中から隠れて来い）」についてだが、「中から」とする例は見当たらず、すべて「かげから」であった。モラエスの聞き間違いか、それとも実際にそう歌われていたのかは不明であるが、どちらであれ意味は大きくは違わない。この文章をモラエスは「お腹にもっている灯から身を隠せ みんなこちらにやって来い」と解釈しているが、行灯が自らの光を指す比喩であるとすれば、それに対して身を隠せというのはおかしいし、「みんなこっちへやってこい」とどう繋がるのかもはっきりせず、納得できる解釈ではない。やはり行灯は比喩ではなく、文字通り行灯を指していると考えるのが自然だろう。言葉を補って意味を汲み取ると次のようになるのではないだろうか。「蛍は行灯の中に入ってその火をもらって自分の灯りを点す。しかし、その様子を見た者はいない。捕まらないようにこっそりと火を盗むのだ。だから蛍よ、今宵も身を隠してこっそりと行灯から火を盗んで来い。そして外を飛び回り、こっちへ来い。」

田の虫ヘイケボタル、眉山のホタル

日本には 40 種以上のホタルが生息し、成虫が発光するものは 21 種、そのうち一般によく知られているものはゲンジボタルとヘイケボタルである。ゲンジボタルの方が体が大きく、光も強い。生息環境は両者とも水辺であるが、ゲンジボタルは水の流れがある環境が必要であり河川に生息するが、ヘイケボタルは止水を好み、水田、池、湿原に生息する。ヘイケボタルは田の代表的な昆虫の一つであり、わらべ歌の「田の虫」と呼ばれるホタルはヘイケボタルのことを指す。地方によっては「コメボタル」と呼ばれる[10]。

昭和20年代の前半までは、全国の都市近郊でホタルをみかけることができたが、水辺環境の変化により激減した。昭和53年（1978）度に環境庁の委託で実施された第２回自然環境保全基礎調査動物分布調査（昆虫類）において、ゲンジボタルが指標昆虫類に指定されて全国調査が行なわれた。その調査報告書の全国版[11]には、ゲンジボタルの生息地の消失・個体数減少をもたらした要因として、農薬使用、イワナ漁などのための毒流し、殺貝剤によるミヤイリガイ駆除、牧場・養豚場などからの汚水流入、家庭排水流入、砕石・土木工事による土砂流入、宅地造成による流水の消失・土砂流入、川砂利採取、河川・用水路の改修、乱獲、水害などが指摘されている。これらの要因による影響がゲンジボタルだけでなくヘイケボタルにも及んだのはもちろんである。

この時の調査において、徳島市ではゲンジボタルの生息個体が確認されなかった。調査報告書[12]には「徳島市内では昭和30年頃より少なくなり、現在は生息していない」と記されている。しかし、数年後の1985年に実施された徳島県自然保護協会による眉山の調査では、眉山にホタルが生息していることが明らかになった。それによると、ゲンジボタルは1950年代まで眉山西麓の名東町一帯に非常に多くみられたが、1960年代に入ってからはその姿を見かけなくなったこと、しかし1985年6月に

行なった調査において地蔵院のため池の谷川からの流入口で相当数の個体を確認したことが記されている[13)]。さらに、ヘイケボタルが地蔵院附近で、オバボタルが地蔵院と黒岩神社で、オオマドボタルが西部公園で発見したことも記されている。また、同書の中で別の調査者は、ゲンジボタルを眉山西部の下町で発見したことを記している[14)]。

モラエスが見た蛍

「おヨネだろうか……コハルだろうか……」では、子供たちが歌う蛍の歌を聞いた後で、モラエスは自分の家の戸口で一頭のホタルに遭遇する。暗がりで家の鍵を挿そうと苦労するモラエスの傍らに飛んできて照らしてくれたこのホタルを、モラエスは亡きおヨネかコハルが虫の姿になって自分を助けにきたのではなかろうかと思いを馳せるところで話は終わる。この話がどこまで本当かは分からないが、モラエス研究会に参加されている古老で、伊賀町に住んでおられる方の話では、昔は町内に蛍が飛んでおり、おそらくゲンジボタルだったと思うということであった。とすればモラエスが蛍を見たというのは本当である可能性が高い。果たしてそれはゲンジボタルだったのだろうか。

子供達が歌う蛍は田の虫、すなわちヘイケボタルであるが、モラエスが見たのがヘイケボタルであるとは言えない。前述のように眉山にはゲンジボタル、ヘイケボタル、オバボタル、オオマドボタルの４種類が近年確認されている。作品の中で、蛍を見たのは６月の９時頃のことと書かれているため、昼行性のオバボタルの可能性は消える。また、モラエスの家は徳島市伊賀町３丁目の住宅地の一角であり、当時から附近に田んぼや湿原がなかったことを考慮するとヘイケボタルの可能性は低い。とすればゲンジボタルかオオマドボタルということになる。この２種は生活環境が大きく異なる。オオマドボタルは生活史を通じて陸生であり、自然林の林縁を好んで生息することから眉山山麓にほど近い伊賀町で見られたとしても不思議ではない。一方、ゲンジボタルはヘイケボタルと同じくホタルの仲間では数少ない幼虫時代を水中で過ごす種類であり、前述のように流れのある水が必要である。ゲンジボタルは存在していたのだろうか。昭和42年（1967）の『徳島むかしむかし』[15)]には、明治37年生まれの古老の話として、眉山山麓でホタルを見た様子が次のように描写されている。

> お春日はんの裏の洞穴は二十間（約三十六メートル）ぐらいは人が立って通れると言うて、きれいな水がどんどん流れ出して、洗だく場があって、夏はホタルが飛んだりしよりましたけんな。錦竜水に水屋が日に何回も水を汲みにきよりました。

この話に出てくる水屋というのは、眉山の湧水や井戸を飲料水として販売する者のことで、『徳島市水道誌』[16)]によれば大正 8 年の調査では、錦竜水、瑞厳水、皃玉水および八幡水が使用されており、計 3,576 戸（同年の徳島市内の戸数は 18,805 戸）の家が販売水を利用していた。このような販売水の利用は、上水道が設置される大正 15 年まで続いた。従って、この古老の話は、昭和より前のことになる。

きれいな流水に棲んでいたという文章からすると、生息していたのはゲンジボタルであろう。この古老がホタルがいたという春日神社の辺りとモラエスが住んでいた伊賀町は、およそ1 km離れているがともに眉山東麓であり、錦竜水と同じく眉山から流れる湧き水である前述の瑞厳水や八幡水はもっと伊賀町に近い。ゲンジボタルが見られても不思議ではない。

これらのことを考えると、モラエスが見たホタルはゲンジボタルかオオマドボタルであったと推測される。しかし、オオマドボタルの成虫の発光は非常に弱く、話に多少の誇張が入っているにせよ手元を照らして助けになったというエピソードが生まれるような光ではない。やはりこの話には日本のホタルでは最も強く光るゲンジボタルが相応しい。

註

1) この作品は1918年にポルトガルの雑誌『Lusa』の別冊に掲載された。

2) 1923年にRenascença Portuguesaから刊行された Wenceslau de Moraes 著 “ Ó-Yoné e Ko-Haru” より (57頁)。同書には“Será Ó-Yoné... Será Ko-Haru?...”を含む18の随想が収められている。

3) 2) の翻訳本『おヨネとコハル』（彩流社、42頁（1989））

4) 広瀬志津雄.『阿波ノ民謡』. 小山助学館. 152頁（1936）

5) 森本安市編集発行.『阿波の民俗採集録』. 423頁（1988）

6) 徳島県教育委員会編集発行.『徳島県の民謡 ― 民謡緊急調査報告書』 (1989) 。③は 80 頁に、④は 368-369 頁に掲載されている。

7) 高橋美智子.『日本わらべ歌全集15　京都のわらべ歌』. 柳原書店. 224-225頁（1979）

8) 大場信義.「田の虫・ホタル ― 生きものたちが集うホタルの飛ぶ田」.『人と水』 3号. 17頁（2007）

9) 我々が主催するモラエス研究会公開読書会においてこの歌詞について話題にしたことがあった。出席者には古老も多かったが、歌詞に「田の虫」や「太郎虫」の入った「ほたるこい」について知っている者はいなかった。しかし、一人だけ高知県日高村で子供時代を過ごした 40 代の方が、「田の虫」と歌われるのを聞いたことがあるとのことだった。

10) 東京ゲンジボタル研究所.『ホタル百科』. 丸善. 52 頁（2004）

11) 財団法人日本野生生物研究センター.『第２回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書(昆虫類)全国版』（1981）

12) 徳島県の調査報告書は昭和55年（1980）３月に「第２回 自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書（昆虫類）徳島県」（環境庁編）として刊行された。また、四国４県をまとめたものが同年６月に「第２回自然環境保全基礎調査（緑の国勢調査）動物分布調査（昆虫類）報告書 日本の重要な昆虫類　四国版」（環境庁編）)として刊行された。

13) 吉田正隆.「眉山の甲殻類」. 徳島県自然保護協会調査報告 第5号『眉山』. 30-49頁（1986）

14) 徳山豊・下泉正敏.「眉山の水生昆虫類」. 徳島県自然保護協会調査報告 第5号『眉山』. 50-51頁（1986）

15) 飯原一夫. 『徳島むかしむかし』.徳島県教育出版部. 48-51頁（1967）

16) 徳島市役所編集発行.『徳島市水道誌』.11-18頁（1928）